

優勝 吟詠道鶴洲流福岡吟詠会 女子(福岡) 吟題：『菊花』(白居易)



「入賞を第一目標に練習してきました、優勝なんて思ってもいませんでしたので、本当にうれしいです。夏過ぎからは月3回集まり、河野声洲（早淵鯉川）会長にも毎回来ていただいて本当に支えになりました。吟題も会長に決めていただきました。着付けも自分でできるように練習してきましたし、本当にこの1、2週間で心がひとつになりました。私も教室を持たせていただいています、声洲先生と一緒に活動して鶴洲流を盛り上げていきたいです」（城戸鶴誓）

2位 福岡県吟剣詩舞道総連盟 男子(福岡) 吟題:『出郷の作』(佐野竹之助)

「ほっとしたと同時に、河野鶴警理事長から『優勝を狙うように』と言われていましたので、少し残念なところもあります。私は個人の一般二部で全国優勝したことはありますが、合吟は初めて出ました。県内8会派の人たちが集まって、全体では6、7回練習してきました。吟題は男らしいということで選びましたが、あまりむずかしく考えず、語尾をきれいに合わせることを意識しました。来年は優勝を目指したいです」

(堺 晃生)



3位 福岡県吟剣詩舞道総連盟 女子(福岡) 吟題：『菊花』(白居易)

「全然予想してなくてびっくりです。福岡県総連女子としては令和元年度に優勝していますが、個人的には何10年前に武道館に出ただけで入賞もしていません。私は桂岳流小倉吟詩会ですが、12会派くらいから集まり、2位の男性チームと同じ時に練習してきました。合吟ですので皆さんの心がひとつになって、合わせることを最大の目標にしました。今朝もバスの中で練習して、悔いのないよう頑張りました」 (岡野麗風)



構成番組終了後に合吟コンクールの順位発表と表彰式を実施。前列右から優勝チームの城戸鶴誓さん、2位堺晃生さん、3位岡野麗風さん

受けたチームとなりました。

昨年度に続き15人で行われた倉吟コンクール。初の西日本開催ということで、広島県11組、岡山県と香川県が各10組など、60組中48組が中国・四国・九州のチーム。そしてベスト3はすべて福岡県勢で、福岡県総連盟河野鶴聲理事長の指導を

60組中48組が
西日本のチーム

全国吟詠合吟コンクール

特別企画構成番組「染む紫の雲の上まで」の
フィナーレ、少壮吟士全員による『祇園精
舎』。男女に分かれてハーモニーも駆使した
高度な合吟で2千人近い観客を感動させた



日本財団助成事業

高松宮妃癌研究基金奉賛 第54回全国吟剣詩舞道大会

初はつの西日本開催で沸いた
吟剣詩舞ぎんけんしぶの祭典

半世紀以上にわたり、日本武道館を中心に東日本で開催されてきた「全国吟剣詩舞道大会」。今回は岡山県倉敷市に日本中から吟剣詩舞愛好家が集い、初の西日本での開催となりました。第55回大会はふたたび日本武道館で開催される予定ですが、式典で伊東香織倉敷市長が「倉敷市民にとって吟剣詩舞は大変身近な伝統芸能。この場所で開催していただきますことを心より感謝します」と挨拶、合吟コンクールから構成番組まで、地元の熱い想いみなぎる舞台が展開されました。

●日時：令和6年11月10日（日）

● 場所：岡山県・倉敷市民会館大ホール

●主催：公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会

●後援：文化庁・岡山県・倉敷市・日本財団・エスエ



令和六年度(第三十八回)吟剣詩舞大賞 功労賞受賞者。左から毛塚靜精、田村天聖月、芳倉清峰、佐藤翔風各氏。受賞者である宮川紫朋氏はひと月ほど前に他界された

岡山県吟剣詩舞道総連盟

藤上翔山理事長

精一杯おもてなしの気持ちで
準備してきました

「都市圏では2千人規模の会場が取りにくい」ということで、名流大会開催等の実績もあり、倉敷市側も非常に吟剣詩舞に友好的なので倉敷市民会館にて開催することになりました。岡山県総連の先生方からも『素晴らしい大会が地元でできるとはうれしい限り。頑張ろう!』と言っていました。精一杯おもてなしの気持ちで、心を込めて全国の皆様をお迎えしよう、と、会議を重ねて準備してきました。合吟コンクール参加者を含めスムーズに集客もでき、動いてくださった皆様のお陰と感謝しております。



柳が揺れる倉敷川沿いに白壁の蔵屋敷が建ち並び、趣ある景観が楽しめる倉敷美観地区。会場となった倉敷市民会館からも程近い

早淵鯉将スーパーチーム校長が企画番組の脚本・演出を担当

「脚本・演出の佐々木宏高は私のペンネームです。佐々木源氏の流れで、塩冶判官高貞の末裔ということで「佐々木」と「高」を付けました。脚本は地元の藤上南山先生(菊水流)が体調の都合でご辞退されて、私が務めることになりました。『衣川』では五月女凱昂を義経、早淵鯉仙を弁慶としましたが、スーパーチームを卒業する二人にふさわしいと思いました。最後の最後によく二人らしい役どころを与えられてよかったです」



最後は全国吟剣詩舞道大会の華、企画構成番組。今回は源義経の辞世と言われる「後の世もまた後の世も廻り会へ 染む紫の雲の上まで」をテーマに、義経の生涯を追う舞台。最高峰の吟と舞により義経の波乱の一生が繰り広げられました。

【構成番組「染む紫の雲の上まで」】最高峰の吟と舞で綴る義経の生涯

脚本・演出／佐々木宏高

『奇襲鶴越』(大野恵造) 吟:堤 龍美、林 杏泉、蒔田淳芽心、林 煌彩 舞:早淵流社中

最初に早淵鯉将宗家が現地を訪れた作者として登場。その後義経軍が崖を馬で駆け下り、平家の陣営を急襲する様子を6人の剣舞で表現した



『一の谷懐古』(梁川星巖) 吟:原田光玲子、菊野桜山、野中秀宗、伊東響峰 舞:菊水流社中



平敦盛の討ち死など数々の悲劇に彩られる「一の谷の戦い」。女性少壮吟士4人の吟と藤上翔山宗家率いる菊水流の詩舞

『扇の的』(松口月城) 吟:巽 吟城、浅田聖謙、石川春海、田村鳳泉 舞:日本壮心流社中



「屋島の戦い」のハイライト、弓矢で扇を射落す那須与一のエピソード。入倉昭星宗家が最初義経に、途中から与一に扮して再現

全国少壮吟詠家選考審査会入選者吟詠少壮コンクールから選考審査会へ

それまでの「全国少壮吟詠家審査コンクール(少壮コンクール)」に変わり、令和6年度に初めて開催された「全国少壮吟詠家選考審査会」。そこで入選した6人が吟詠を披露。3回入選を果たした郡司明風さんと平野松草さんは、それぞれ『母を奉じて嵐山に遊ぶ』『静夜思』を吟じました。



郡司明風(左)「式典で盾を頂いた時は物理的にも心理的にもずっしりと重みを感じました。吟詠は課題が残ったのでまた精進して頑張ろうと思っています」 平野松草(右)「これが少壮になった人の吟なの?と思われないように気をつけましたが、何か誇らしいような、心機一転頑張ろうという気持ちになりました」

全国地区連絡協議会推薦吟剣詩舞・特別出演岡山大学吟詠部が伝統のエールと吟

地区連協推薦吟剣詩舞では中部地区の綿谷芳由さんが入選者吟詠に続いて『伊勢神宮』を吟じます。そして特別出演として岡山大学吟詠部が登場。1959年に創設された岡山市は関西吟詠文化協会に所属、伝統のエールを女子部員が力いっぱい行い、続いて無伴奏で『壁に題す』を吟合。



「フレー!フレー!吟詠部!」というエールに続き、無伴奏で『壁に題す』(村松文三)を吟合する岡山大学吟詠部(12ページ参照)。吟詠は関西吟詠文化協会、剣詩舞は菊水流から指導を受けている

幼少年代表・開催地代表吟剣詩舞岡山と広島の幼少年による可憐な吟と舞

幼少年代表として出場したのは、中国地区連絡協議会の4組。幼稚園年中組から高校生まで、岡山県と広島県の子供たちが吟と舞を披露しました。『天草洋に泊す』を詠った大山桔乃さんと『偶成』を舞った河瀬泰知さんは、式典で幼少年を代表して奨励賞の賞状を授与されました。



広島県総連幼少年の吟、岡山県総連幼少年の詩舞による『弘道館に梅花を賞す』(徳川景山)。このほか吟と剣舞による『偶成』(大鳥圭介)など、計4題で澆刺とした舞台を披露した

全国コンクール優勝者の披露複数の部門での優勝者も出演

今年度は青年の部の原光希さんが吟詠と詩舞の両方で優勝したのでそれぞれ『従軍行』と『和歌・よもの海』を披露。また詩舞少年の部優勝の堀真大朗さんと二般二部優勝の入倉仁美さんは、群舞の詩舞優勝チームとして『銭塘懷古次韻』で共演しました。



(右)吟詠の披露に続き、詩舞を舞う原光希さん。「大勢のお客さんの前で吟じ、踊ることができてすごくうれしいです」と感激。(左)詩舞一般二部優勝の入倉仁美さんは、受験のため欠席した堀真悠子さんに代わり群舞にも出場



『衣川』(大野恵造) 吟:吟詠スーパーチーム 舞:剣詩舞スーパーチーム



義経に扮した五月女凱昂(左)と弁慶に扮した早淵鯉仙(右手前)。スーパーチームの中心的存在だった二人は今回をもって卒業

『辞世』(武蔵坊弁慶)、『辞世』(源 義経)

吟:河野鶴聲、和田彩楓



暗転後、青研吟士の二人が義経と弁慶の辞世を朗詠。その後義経と弁慶は黄泉の国へと旅立ち、舞台左右から少壮吟士が登場して『祇園精舎』のフィナーレを迎えた(6ページ)

早淵鯉仙、五月女凱昂がスーパーチームを卒業



スーパーチームの仲間および指導された先生方とともに。五月女凱昂さんはメンバーにSTのイニシャル入り扇子をプレゼントしたが、「『ST』はスーパーチームの略ではなく、五月女智仁(本名)の略です。これが言いたくて作りました!ウソですよ(笑)」と最後まで冗談を言って皆を笑わせた

全国吟剣詩舞道大会の日をもって35歳を過ぎたメンバーはスーパーチームを卒業。

早淵鯉仙「スーパーチームとしてこれまで、日本はもとより、海外での公演など様々な活動をさせていただきました。とくにシカゴ公演はスーパーチームが「チーム」になれた気がします。今卒業して振り返った時に、自分は結局スーパーチームとして何が残せたのか、と少し心配な気もします。でも、僕も含めてこれまでの卒業メンバーの意思や思い、それは後輩のメンバー達が引き継いで、これからまたいろんな場面で示してくれるものと心から期待しています」五月女凱昂「平成27年6月に三重県四日市で集まった時からいろんな舞台に立たせてもらって、本当に楽しかったです。なんでもない私がスーパーチームで豪華すぎる先生方にご指導いただけたことやお話させていただいたこと、これだけでも宝物。さらに、素晴らしい仲間と出会えたこと、一緒に多くの作品をつくれたこと、もう何を思い返しても、宝物だらけです。卒業しても、この経験と思い出は一生物です。関わっていただいたすべての皆様に心から感謝します」

『壇ノ浦を過ぐ』(村上仏山) 吟:岩永優岳、関口麗煌、中野祥理 舞:大日本正義流社中



平家滅亡に至る「壇ノ浦の戦い」を偲ぶ名詩。詩舞の多田正稔家元(左)が作者、剣舞の多田正晃宗家(右手前)が平知盛、多田正千衣(右奥)が二位尼に扮する

『和歌・見るとても』(静御前)、『静御前』(横山耐雪) 吟:山中梅鈴子、今城龍栄、野嶋帆楓 舞:星舟流社中



義経は頼朝に追われ、義経を慕う静御前は頼朝の前で舞を披露させられる。見城星梅月宗代(左)と星舟家元が母娘で静御前を舞う

『義経流離』(大野恵造) 吟:尾崎水紅、土澤美岳、加藤契琵、長谷川素菜 舞:青柳流社中



頼朝にそねまれ奥州平泉に逃れようとする義経。義経を支える弁慶に青柳弦太朗宗範が扮し、明日なき逃避行を描く

『弁慶の舞』(武蔵坊弁慶)、『弁慶』(杉浦重剛)

吟:八代光晃子、米本耿泉、塩澤宗鳳、山岡桜山 舞:暁明流社中



五条大橋で牛若丸に敗れて以来、義経に生涯付き添ったとされる武蔵坊弁慶。上岡晁壮宗家が弁慶に扮して激しい生涯を熱演

『安宅の関』(角光嘯堂)

吟:松葉水緑、宇井修光、安藤聖楓、向山侑珠、小池貴心 舞:天辰神容流社中



北陸から奥州に入ろうとした義経主従は安宅の関で関守の富樫氏に疑われる。弁慶の勧進帳の一幕を天辰神容流社中が詩舞で表現